

ジェイン・オースティンを読むドラッカー

Drucker: The Man Who Reads Jane Austen

三浦一郎

Ichiro Miura
(立命館大学)

Summary

Jane Austen was a British novelist during the period of Napoleonic Wars. Her novels are very popular and well-read today. Austen was rated as England's greatest social analyst by Drucker in *The Future of Industrial Man*. Until his death since then, he was a fan of Jane Austen. Austen's theme is love and marriage of women. And Drucker's theme is knowledge work and knowledge worker. I tried to understand by synthesizing these two themes.

ジェイン・オースティンを読むドラッカー

ドラッカーについてのあるイメージがある。ジェイン・オースティンを読むドラッカーのイメージである。ドラッカーが亡くなって1年ほどたった頃、ドラッカーが亡くなる直前までジェイン・オースティンを読んでいたということを知ったことがある。それ以来このイメージが気になっている。

ジェイン・オースティンは最近でも非常に人気のある小説家であるし、その作品は何度も映画化されている。小説は読まなくても映画によってジェイン・オースティンに親しんだ人は多いと思う。小説の愛好家であり、同時に『最後の四重奏』『善への誘惑』⁽¹⁾という2つの小説の作者でもあるドラッカーが、ジェイン・オースティンを読んでも何の不思議もないと思われるかもしれない。そしてドラッカーの小説には、そのユーモアと緻密な心理分析によってジェイン・オースティンをしのばせるものがあることからしても、ドラッカーのジェイン・オースティンに対する傾倒がわかる。

しかしドラッカーにとって、ジェイン・オースティンは単に好みの小説家であるというにとどまらず、特別な意味を持っていた作家である。ドラッカーが初期の作品『産業人の未来』の中でジェイン・オースティンに次のように言及したことはよく知られている。

「イギリス社会の理念と理想，規範と生活，個人的，社会的野心のあり方は，イギリス最高の社会分析家たるジェイン・オースティンが1800年当時の世代について書いて以来ほとんど変わっていない。」⁽²⁾

「イギリス最高の社会分析家」という評価は普通ではない。ドラッカーは、若いころから亡くなる間際まで一生を通じてジェイン・オースティンを読んでいたことになる。それにしても、ドラッカーはなぜジェイン・オースティンをそのように愛好したのだろうか、そしてジェイン・オースティンに何を讀んでいたのだろうか。ジェイン・オースティンは、主人公の女性の恋愛と結婚を、ジェントリーに属するかジェントリーに関係する2、3の家族を舞台に、ユーモアあふれる筆致で描いた作家である。そのような作家が、なぜ「イギリス最高の社会分析家」なのだろうか。

ジェイン・オースティンの世界をめぐる——『自負と偏見』を中心に

ジェイン・オースティンは1775年に生まれて1817年に死んだイギリスの小説家である。代表作には『分別と多感』『自負と偏見』『マンズフィールド・パーク』『エマ』『ノーサンガー・アベイ』『説き伏せられて』という6篇の小説がある。その中でも代表作とされるのが『自負と偏見』⁽³⁾である。この作品の刊行は1813年であるが、原型は1797年に出来上がっている。20歳を過ぎたばかりの若い女性が書いたのかと思うと感慨を覚える。この作品によりジェイン・オースティンの世界をのぞいておきたい。

1 夏目漱石による評価

わが国ではすでに明治期に、夏目漱石が『文学論』の中で「Jane Austenは写実の泰斗なり。平凡にして活躍せる文字を草して技神に入るの点において、優に髭眉の大家を凌ぐ。余云う。Austenを賞玩する能わざるものは写実の妙味を解し能わざるものなり」と絶賛している。そして『自負と偏見』の冒頭部分を原文で2ページに渡り引用したうえで、オースティンの表現の特徴を次のように述べている。

「Austenの描く所は単に平凡なる夫婦の無意義なる会話にあらず。興味な

き活社会の断片を眼前に髣髴せしむるを以て能事を終るものにあらず。この一節のうちに夫婦の性格の躍然として飛動せるは文字を解するもの否定する能わざる所なるべし。夫の鷹揚にして、婦の小心なる。夫の無頓着にして婦の神経質なる。夫の和諧の範を超えずして、しかも揶揄の戯を禁じ得ざる。婦の児女の将来を思うて咫尺の謀に余念なき—悉く筆端に個々の生命を託するに似たり。夫婦の寿はもとより知りたく、遭逢の変また計りがたきはいうを待たずといえども、この一節によりて彼らの平生を想見するは容易なり。即ちこの一節は夫婦の全生涯を一幅のうちに縮写し得たるの点において最も意味深きものなり。ただに縮写なるが故に意味深きのみならず、吾人一度び彼等性格の常態を比縮写によって把住するとき、かねてその変態をも予知し得べきが故なり。有為と云い、転変となづくる浮世にあつて、運命の翻弄一定の度を超過するとき、彼等もまた特殊の境界に入りて特殊の活劇を演ずるやも計りがたしといえども、この活劇は既にこの一節において表出せられたる彼等性格の常態中に含有せらるるにあらずや。」⁽⁴⁾

ここでは漱石の引用箇所ではなく、すぐ続くところで主要登場人物ベネット夫妻について記しているところをあげておく。ジェイン・オースティンの人間観察の特徴が現われているからである。

「ミスタ・ベネットという人物は、抜け目のない機敏さと、ちょっぴり皮肉と、用心深さと、そして気まぐれとが、不思議に入り混じった男だった。おかげで夫婦生活23年の経験をもってしてさえ、いったいどんな人間なのか、奥様にもよくわからないのだった。一方奥様のほうはというと、これはずっと簡単だった。頭が悪くて、物知らずで、しかもひどいお天気屋だった。気に入らないことがあると、一人勝手に気に病んでいる。何しろ一生の目的というのが、娘たちをかたづけることであり、楽しみといえば、人を訪ねて世間話に時を消すことだった。」⁽⁵⁾

2 『自負と偏見』のストーリー

『自負と偏見』のあらすじを、ベネット家の姉妹の恋愛と結婚に限定して、簡単に紹介する。2000ポンドの年収のあるベネット家には5人姉妹がいる。主人公エリザベスは5人姉妹の2番目である。美人でおとなしい長女ジェイン、

不美人の三女、美人だが軽薄な五女リディアがいる。限嗣相続により、父親の死後は土地・家が親戚の男性の手に渡ってしまい、自分と娘たちにはほとんど財産が残らないので、母親は、娘たちに早くよい条件の結婚をさせたくて仕方がなく気をもんでいる。

そこに近所に越してきた4000ポンドの年収のある金持ちの青年チャールズ・ビングリーが登場する。長女のジェインはビングリーに見初められる。ビングリーにはダーシーという1万ポンドの年収がある大地主の友人がいるが、ダーシーは愛想が悪く他を見下すような態度である。

エリザベスは、舞踏会でダーシーが自分の悪口を言うのを聞き、彼に悪印象を持つことになる。そこへエリザベスの前にウィッカムという好青年が現れる。ウィッカムは以前ダーシーによりひどい目にあわされたと話し、エリザベスはその話を信じ込む。そして、ビングリーはジェインに気持ちを打ち明ける前にロンドンに行ってしまう、ジェインは落ち込んでしまう。

一方、エリザベスに惹かれたダーシーは求婚するが、はっきりと断られてしまう。ダーシーはエリザベスに自分に対する誤解があることを知り、手紙を書いて自己弁明する。それにより、エリザベスはウィッカムの話が嘘だったことを知る。その後エリザベスとダーシーは再会して、互いの偏見はなくなり、親しくなりかける。

しかしそのとき、末娘のリディアがウィッカムと駆け落ちしたという知らせが届く。ダーシーはエリザベスに内緒で、ウィッカムの借金を片付け必要な資金を用立てて、リディアと結婚させる。結局エリザベスとダーシーの間のすべての誤解が解けて彼らは結婚し、ジェインもビングリーと結婚する。

要するに『自負と偏見』は女性の恋愛と結婚をめぐる喜劇である。私もドラッカーの愛読書ということなので読むことにした。中野好夫訳の文庫本はずいぶん前から手元にあったが、500ページ以上もあり長すぎると思ったし、恋愛と結婚の物語を読むということに対して興味も感じなかったので、それまで読んだことはなかった。たいてし期待もせず読み始めたが、気がつくときすっかり『自負と偏見』の世界の虜になっていた。中野が訳書の解説の中でサマセット・モームの言葉を引いていた。

「どの作品にもこれといったたいした事件は起こらない。それでいて、あるページを読み終えると、さて次に何が起こるだろうかと、急いでページをくらすにはいられない。ところが、ページをくってみても、やはり何もたいしたこ

とは起こらない。だが、それでいて、またもやページをくらすにはいられないのだ。これだけのことを読者にさせる力を持っているものは、小説家として持ちうる最も貴重な才能の持ち主である。」

この言葉を実感する楽しい読書だった。とくに殺人が起きるわけではないが、非常に面白い上質のミステリーを読んだときの感覚に似ていた。小説としての面白さからして、ドラッカーが愛読していたのも理解できると思った。

3 恋愛と結婚、そして地位と財産

ジェイン・オースティンの小説のドラマと喜劇は、細かい社会的差異に対する鋭い認識に依存しているといわれている⁽⁶⁾。オースティンが姪アナに語ったという有名な言葉がある。「ある田舎の村の3か4の家族こそがまさに取り組むべき問題である」。これらの家族の間にある微妙な社会的差異を理解することが、オースティンの小説の理解にとって決定的に重要である。オースティン自身は彼女の生み出したキャラクターの内のいくつかが明らかに示している地位の差に対する強迫観念的なこだわりを必ずしも是認しているわけではない。むしろ、豊かであるとは到底いえないにもかかわらず、もっとずっと豊かな家族とのつながりを持つ田舎の聖職者の娘として、オースティンは地位と所得の差が人々の生活、特に女性の生活に対して与える影響について、抜け目なく現実的に見ることができた。

オースティンが書くのは、ある特殊な社会集団のことである。すなわちナポレオン戦争時代の田舎のエリートである。しかしこの田舎のエリートたちについては注意深く定義する必要がある。

オースティンは、立派な爵位を持った家族からなる貴族社会をほとんど取りあげないし、それに共鳴することもない。オースティンはまた、土地所有によって所得と地位を保つ伝統的な田舎のジェントリーについて書いたとよく言われるが、オースティンの興味の的は実際にはそこにはない。オースティンの関心は、プロパーのジェントリーの端にいる、もっと不安定な生活だが、彼らのコネクション、教育、あるいはコミュニティにおける役割によって「近隣の最良の社会と親しく付き合う」権利を与えられた、オースティンの父の教区牧師のようなタイプの人々である。

ジェイン・オースティンはこのような登場人物たちを描くことによって、「イギリス社会の理念と理想、規範と生活、個人的、社会的野心のあり方」を表現

したのである⁽⁷⁾。

ドラッカーの結婚と母たち

ジェイン・オースティンの世界が女性の恋愛と結婚をテーマとするものであった以上、次はドラッカーとドリスの恋愛と結婚が話題となる。そしてここではジェイン・オースティンの小説と同様に母たちが活躍する。

なおドラッカーは家族についてほとんど語らないし、語るとしてもきわめて韜晦的な語りになるので、主としてドリス夫人の著書が資料である。その野中ともよ訳『あなたにめぐり逢うまで』には⁽⁸⁾、巻末にドラッカーの文章が収録されており⁽⁹⁾、私的生活をほとんど語ることのないドラッカーの回顧として貴重である。

1 母たちについて

ドラッカーの『傍観者の時代』には家族についての若干の言及がある。父方については、先祖がオランダで聖書の印刷を業としていたことがふれられているくらいである⁽¹⁰⁾。母方については、イギリス系銀行の経営者であった祖父と、ドラッカーのヒーローとも言うべき祖母が登場する。祖父が亡くなった後、母がシュワルツバルト夫人の設立した予備校から大学へ進む興味深い記述がある。母はウィーン大学で医学を学び、その際フロイトの精神分析の講義を聞いたというエピソードは有名である。若い時代の母が活発な女性であったことは、山登りのグループのエピソードを見てもイメージすることが可能である。

母は大学を卒業し医師の資格は取得したものの、医師の仕事には就かなかったようである。そして官僚のかたわら大学進学予備校の教師でもあった父と結婚し、主婦となってドラッカーをはじめ2人の男の子の母となった。ドラッカー家は著名な建築家ワグナーの設計した家に住み、その生活がヒトラーによるオーストリア合併まで続く。そしてドラッカーの両親はアメリカにわたるが、アメリカにおける母については特にさしたる記述はない。父と異なり、母はアメリカにあまりうまく適応できなかったようである。

結婚までの母のイメージと異なり、結婚後の母については、ドラッカーによる精彩ある記述は行われていない。後にドラッカーの結婚をめぐって一瞬登場するだけである。

他方、ドリス夫人の母については、ドリス夫人の著書によって鮮やかにイメージが伝えられている。ドイツで小売業を営む中産階級の家族の下に生まれたドリスの母は、ドリスの父フリッツ・シュミッツと結婚し主婦となり、ドリスたち3人の子供を得る。ドリス夫人の著書の中で父が登場する場面はきわめて限られたものである。主に、母と娘ドリスの関係、特に母による娘に対する圧迫とも言うべき内容が、多少喜劇的な筆致で記述されている。そこには、ドリス夫人の母の夢が、ドリスの結婚問題に対する干渉という形で表されている。

2 反対する母たち

ドラッカーとドリスの結婚に対してはドラッカーの母もドリスの母も反対である。

1933年にドラッカーとドリスがロンドンのピカデリーサーカスでフランクフルト大学時代に以来の再会を果たしたエピソードは、ドラッカーの著書にも、ドリスの著書にも登場する。そして2人の交際が始まるが、この交際をやめさせようとするドラッカーの母の行動についてはドリス夫人の著書に興味ある記述がある。

「ミセス・ドラッカーにとって、ドイツ人が未来の義理の娘になるのは、ミセス・シュミッツにとってオーストリア人が未来の義理の息子になるのと同じように、承服しがたい由々しき事態だった。アメリカでいえば、北部人と南部人が結婚するようなものであり、もっと我慢ならないのは、そのドイツ娘が金持ちでないことだった。私の母が娘をロスチャイルド家に嫁がせると決めているのとちょうど同じように、ピーターのおかあさんも、息子にはイギリスの大富豪『サスン』一族から嫁をもらうことに決めていた。いずれも母親たちの夢に過ぎなかったが、……」⁽¹¹⁾

お互いドイツ人とオーストリア人を嫌いながら、ミセス・ドラッカーがサスン家から嫁をもらうことをイメージし、ミセス・シュミッツがロスチャイルド家に嫁入りさせることをイメージするところが、まったく同様の発想と行動であり、興味深い。

ドリス夫人の母は、なぜドリスがロスチャイルド家の嫁になることを期待していたのか。その理由をドリス夫人は「母はお金とコネさえあればなんでも自

由に手に入ると信じていた——富、名声、試験に受かること、富くじにあたること、競争相手を負かすこと、そしてしかるべきところにしかるべき友人を得ることも。お金とコネさえあれば、不愉快なこと——軍役とか訴訟とかも回避できた」からであると理解している。自分の結婚によってかなえることのできなかった社会的地位に対するニーズを、娘の結婚によって満たすことができるのではないかと期待していたらしい。そしてドリス夫人の著書のタイトルにもなっている次のような言葉を発している。

「ラジウムを発明しなさい。さもなければ、髪の毛を引っこ抜くからね。本当にのろまんだから！ あなたは意気地なしなのよ、お父さんみたいにね。あなたたちには世の中の仕組みがわかっていないの。私にはわかっているわ。ロスチャイルド家のコネがあれば、発明できるものについて、なんでも情報が耳に入ってくるし、いくらでもあなたに資金を出してもらえるし」⁽¹²⁾

女性と専門職業

1 何のために大学に行ったのか

1930年ごろ女の子が大学に行くということにどんな意味があったのか。将来の専門的職業人を目指して大学に行ったのではなかった、あるいは将来職業婦人にするために母たちは娘を大学に行かせたのではなかった、とドリス夫人は言う。ドイツの中産階級の感覚からいえば、既婚女性が職業を持つことなど、とんでもないことであったからである。

それならば、何のために大学に行ったのか。ドリス夫人は次のように述べている。

「高等学校の卒業証書を得た若者は、大学へ進むものと思われていた。女の子の場合は、表向きの目標は教育の継続であったが、真剣に将来の専門職を目指すものではなかった。実質的に、女の子の誰もが、いずれ3、4年のうちに結婚するのだ。とはいっても、女性解放の兆しが見えていたので、娘たちを大学で勉強させることを人はなんとなく認め始めていた。おまけに、娘たちは大学で夫を見つけることもあった。ことによると、娘の父親の事業とか専門職を助け、将来、跡をついでくれるような有望な男性を。私の場合、

父の小売業は、誰かに引き継がせるほどのものではなかったが、

しかしながら、自分の息子のいない医師とか薬剤師の場合は、父親の商売を引き継ぐ可能性のある候補者と娘が結婚することは、至って重要であった。娘自身を父親の助手、または後継者と考える人は一人もいなかった。そんな考えは、娘が“行かず後家”になるという恐ろしい可能性をはらんでいた。1930年代までは、激しい反対に抵抗しつつ、医師、弁護士、あるいは科学者となったごく少数の女性は全員未婚だった。中には例外もあったかもしれないが、少なくとも私はそういう例を知らない。」⁽¹³⁾

しかし既婚女性が職業を持つことについてのドラッカーの立場は、まったく異なっている。

2 結婚の遅れた理由——プロの職業婦人としてのドリス

ドラッカーは「当時でもはっきりしていたのは、ドリスが完全にプロの職業婦人だということだった」という判断のもとに行動している。ドラッカーは結婚を決意してから3年も結婚までに時間のかかった理由を、大不況下のイギリスの労働環境と2人の就いていた仕事から説明している。

「当時、ドリスも私もとてもいい仕事に就いていて、特に、まだ二人とも20代前半であったことを考えると非常に恵まれていた。ドリスはマークス&スペンサーという会社の消費者調査部門の責任者だった。……

消費者調査は数年前に出来たばかりの専門分野で、ドリスはヨーロッパにおける数少ない初期の研究者だった。私のほうは、6、7年前の1920年代半ばに設立された研究分野である、ヨーロッパの投資業務と証券分析のパイオニアの一人だった。そして、小さいながらも非常に高い収益を上げて急成長中の投資銀行において、すでに上級の管理職にあった。

しかし、当時私たちが働いていたイギリスには、正式な法律ではないが、広く慣例として守られていた決まりがあった。働いていた女性は結婚したとたん職を失うのである。大恐慌の時代だったから、イギリスの失業率は12%から15%もあり、既婚女性が仕事を続けると男性から職を奪うことになる信じられていた。……

そういうわけで、私たちがイギリスに住んでいる間に結婚することは、ド

リスが仕事を失うことを意味していた。

しかし、当時でもはっきりしていたのは——少なくとも私にはわかっていた——ドリスが完全にプロの職業婦人だということだった。」⁽¹⁴⁾

すでにふれた「既婚女性が職業を持つことなどとてもない」という感覚は、1930年ごろのドリス夫人の実感であったと思われる。それに対して、ドラッカーは歴史家としての視点から、第1次大戦後のヨーロッパの女性と専門職業の状況と、それに対する大不況の影響を、次のように述べている。

「第1次大戦後のヨーロッパでは、仕事を持つ女性はかなり普通になってきていた。私が生まれ育ったオーストリアの首都ウィーンには、1920年代すでに女性の医師、心理学者、薬剤師、歴史学者、建築家、物理学者などがたくさんいた。ドリスが育ったドイツでも多く見られるようになってきていた。その中には既婚女性も大勢いた。イギリスはやや遅れていたが、状況はそれほど違っていたわけではない。

だから、すでにかんがりの大企業で責任ある仕事をしていたドリスも、伝統的基準から行くと少し若かったこと以外は、それほど特異な存在ではなかった。とはいえ、約100年前に産業革命が始まって以来、経験したこともないほどの規模で失業をもたらした大恐慌の政治的・社会的圧力は大きかった。だから、ドリスのキャリアを守るために結婚延期もやむをえない選択だったのである。

私にもドリスにも、私たちの結婚が末永く幸せであるためには、ドリスが職業人として成長し、発展し続けていくことができること、それが不可欠であることははっきりわかっていた。こうして結婚を伸ばしていた私たちであったが、1936年になってやっと——石炭庫での一夜から3年がたった——イギリスを離れ、アメリカへ移り住む決断をした。アメリカにはこんなばかげた決まりはなかったから、ドリスは結婚し母となり、その上キャリアを重ねていくことができる。」⁽¹⁵⁾

アメリカへの移住

1 決断の契機

ドラッカーとドリスは結婚しようと思ったのと同時にアメリカ移住を話し合

い始めるが、2人ともよい仕事に就いているイギリスでの仕事を辞めて、イギリスよりも高い失業率と不況のアメリカに渡る決断がなかなかできない。移住する必要があること理由は、ドラッカーの言うように、結婚と仕事をめぐる問題であったらう。しかし移住の決断の契機はそれだけではない。その間の事情を、ドリス夫人が語っている。

「普通に行けば、私たちは婚約し、結婚式の日を決めたろう——両親が賛成するかどうかに関係なく。しかし私たちはさらに4年間結婚できなかった。あの大不況の時代、イギリスの女性は結婚したとき自動的に解雇された、彼女が雇用されていない男のために場所を空けることになる信じられていたので。ピーターも私もよい魅力的な仕事を持っていた。私は急成長中のイノベティブな小売チェーンであるマークス&スペンサーで市場調査を担当していたし、ピーターは投資銀行のエコノミストだった。しかし当時のイギリスの賃金は低かったので私たちがピーターのサラリーだけで生活するのはたいへん難しかったらう。

私たちは若かったし、私たちの未来、私たちの結婚、そして私たちの子供のことを夢見た——それは不可能な目標だとはわかっているが、ヒトラーは私たちの知る世界の破壊という犠牲を払って彼の千年王国の建設を堅く決意していた。そして私たちは、イギリスがヒトラーに対する宥和策を進めていることに、ますます重苦しさを感じていた。1936年秋に私たちは結婚しアメリカに向かうことを決めた。」⁽¹⁶⁾

このように、当時のヒトラーに対するイギリスの宥和政策がドラッカーたちに与えた影響を見過ごすことはできない。

2 結婚生活の回顧

1937年に結婚し、アメリカに移住してから、ドリスは1942年までニューヨークで消費者調査の仕事を行う。そしてドラッカーがベニントン大学の教授になったころから相次ぐ出産・子育てとともに、学生・大学院生として大学で数学と物理学を学び、後に物理学の修士学位をとる。その後自宅で科学分野の編集者の仕事を行うが、後に特許手続きを扱う弁理士となって活躍する。1970年ドラッカーがカリフォルニアに移ったのち、ドリス夫人は発明家となり、起

業してその会社のCEOとなり活躍する。ドリス夫人は家庭生活と仕事と両方に忙しく活躍することになった。

ドラッカーは結婚生活を回顧して次のように述べている。

「ドリスが私の仕事にどんな影響を与えたかとよく尋ねられる。直接的には何もない、と私は答える（妻の仕事に私が直接の影響は何も与えていないのと同じだ）。私たちは才能も専門的な興味もまったく異なっているが、妻はずっと私にとってのお手本として、計り知れないほど重要な存在だった。現在でもそれに変わりはない。プロとしての仕事振りや自己鍛錬の手本であるだけではない。妻は私が老け込んで自分の殻に閉じこもるのを防いでくれる。私が新しいことに挑戦し、興味や知識の範囲を広げるよう励ましてくれる。わけても活動的であり続ける元気を与えてくれる。」⁽¹⁷⁾

そして、「幸せな結婚の秘訣は？」という問いに次のように答えている。

「『幸せな結婚』は、普通、夫婦が一緒に働くことで成り立つと考えられている。一緒に働いている幸せな夫婦はいくらもいる。私が知っている最も良い例は、江戸時代の偉大な画家池大雅と妻でこれも画家の池玉瀾だ。

しかし、ドリスと私は一緒に仕事はしない。結婚してまだ何年もたたないころ、妻は実際に私の最初の2、3冊の本の批評と編集をしてくれた。妻は有能な編集者だった。……しかし、私たちは、じきに私の書いたものについて一緒に仕事をするのはやめにした。揉め事の原因になることがあまりにも多かったからだ。これは賢明な選択だった。……

私が妻の仕事に参加するチャンスは一度もなかった。私には科学のことはさっぱりわからないからだ。だが、2人とも相手の職業と業績を非常に尊敬していることが、幸せな結婚を長続きさせるのに役立ったと思う。

私たちは互いに相手と4人の子供たちを誇りにしている。」⁽¹⁸⁾

さらにドリス夫人とドラッカーの父との関係、ドラッカーとドリス夫人の母との関係にふれておく。ドリスは結婚してから初めてドラッカーの父に会った。そして2人はたちまち親しい友達になり、30年後、父が91歳で亡くなるまで、ドリスはずっとドラッカーの父の一番の親友だった。一方ドリス夫人の

母との関係は次のようになった。

「私（ドリス）は母とは亡くなるまで親密に付き合った。母は彼女が住むロンドンからよく私たちと彼女の孫たちを訪ねてきた。母は、『見下げ果てたオーストリア人』ピーターがどんどんお気に入りになったし、今度はピーターが母の恐れを知らないところや辛辣な機知をほめるようになった。

私は子供から未成年の時代をつうじてあんなにも私を脅かした母に対する恐怖を克服したわけではない。しかしロンドンのバーンズ家でのあの恐ろしい晩のあと、母は決して再び私を支配し統制しようとはしなくなったのだ。」⁽¹⁹⁾

「知識労働と男女の役割分担」について

ドラッカーの作った家族は、共働きの夫婦であり、核家族であった。これは、ドラッカーとドリス夫人が生まれ育ってきた環境とはまったく異なっている。ドラッカーが「社会転換の世紀」⁽²⁰⁾の中で述べている家事使用人（この存在が中流家庭の定義そのものであった）の消滅は、基本的にドラッカーの「家」においても同様に起きていたことに違いない。

ドラッカーは1994年の論文「知識労働と男女の役割分担」のなかで⁽²¹⁾、20世紀において知識労働の役割が飛躍的に拡大したことによって、人類の歴史上延々と続いてきた男女の役割分担が変化してきたことを指摘している。「今日の知識労働では男性と女性が同じ世界で同じ仕事をし、並んで働き、ともに競い合うようになっている。」

人類の歴史上、肉体労働の場合、農夫の妻、職人の妻に見られるように、女性はずねに男性と同様に働いてきた。しかし、少しでも技能と地位にかかわりのある仕事は、常に男性の仕事と女性の仕事に分けられ、その役割分担は決まっていた。しかしそれが、知識労働の出現と役割の増大によって根本的に変わっていく。

「知識は性別には関係がない。知識と知識労働のいずれに対しても、男女の両性がアクセスできる。したがって、知識労働がかなりの量に増加すると、女性はそれらの知識労働について資格を持ち、挑戦し、就業し始めた。」

この動きは加速し、「最近の20年間では、男性と同じ種類の知識労働への進

出は、1つの『大義』とまでなった。」

「いまや高度の知識労働になるほど、男女は同じ仕事をするようになっていく」「今日知識労働に起こりつつある男女の役割分担の消滅は、われわれの生き方を変化させるものである。」

ドラッカー家の場合すでに見てきたように、ドリス夫人の最初からの仕事はすべて知識労働である。マークス&スペンサーにおけるマーケット・リサーチの担当者としての仕事から、編集者、弁理士、発明家および企業経営者に至るまで。

このような状況は、労働人口全体や人間の働き方のみならず、家族のあり方に最大の影響をもたらす。「いかなる時代でも、成人女性の第一の責任は家庭を作り、子供の面倒を見ることであるとされ」「これに対し、成人男子の第一の責任は妻と子を養うことであるとされ」てきたが、このことに影響がもたらされざるをえない。これは「あらゆる歴史と伝統の逆転」である。

ドラッカーは、19世紀はじめの女性解放について次のようにシニカルに言及している。

「19世紀初めに始まった、中流家庭の立派な主婦を理想とし、『女性の解放』とは、女性が働かなくてもよいようにすることであるとしたり『女性解放運動』は今日では誤りであり失敗であるとするのが、広く認められるに至っている。」⁽²²⁾

おわりに——ドラッカーはなぜジェイン・オースティン『自負と偏見』を愛好したのか

現在でもジェイン・オースティンの書いた社会的差異の世界がまったく消えてしまったわけではない。所得と財産の格差は存在するし、私たちが生きる生活文化にも多様性がある。しかしジェイン・オースティンが書いたように、結婚が人間の社会的地位と役割を決定してしまうような状況は大きく変わってきたのではないと思われる。

ドラッカー夫妻が典型的に自覚的に生きたように、私たちは2つの社会を生活している（ここでは社会という言葉で、何らかの基準により形成された人間集団という意味で使用している）。家族という社会と、仕事にかかわる社会（非営利組織に対する参加もここに含める）である。ジェイン・オースティンの世

界では、男系への限嗣相続制度を前提とすれば特に女性にとっての結婚が、家族と地域社会における位置と役割を決定するものとなっていた。『自負と偏見』におけるエリザベスの細かい社会的区別にとらわれない発想は魅力あるものであり、健気であるとさえ言うことができるが、エリザベスの現実には結婚によって決定されざるをえなかった。

しかしドラッカー夫妻の生き方は異なっていた。夫婦そして家族としては、和辻哲郎の言うように夫婦共同体、父母子共同体を、すなわち家族共同体を生きている⁽²³⁾。一方、仕事においては、夫と妻のそれぞれが知識労働者としてそれぞれの組織と社会を生きているのである。ドラッカーとドリスは、知識労働者としてはそれぞれ独自の世界を生きているが、ドラッカーのドリス夫人への対応を見ると、ドラッカーがドリス夫人の知識労働者としての特性を強化し発展させるべくリードしていたかのように見える。

ドリス夫人の母に対するドラッカーの賞賛は、言うまでもなくドリス夫人の母の発想の古さと狭さを評価しているわけではなく、ドリス夫人の母の人を恐れることのない辛辣な発言と機知の中にエリザベスのイメージを見ていたようにも思われる。

ジェイン・オースティンを時々書棚から出し、拾い読みすると、その都度ジェイン・オースティンの描く人間喜劇を楽しむことができる。ドラッカーは、ジェイン・オースティンを読みながら自分たちがいかに生きてきたかを振り返っていたに違いない。未来の家族と社会がどうなるかを考えながら。

【文献】

Peter F. Drucker (1942), *The Future of Industrial Man*, John Day. (上田惇生訳 (2008) 『産業人の未来』ダイヤモンド社)

Peter F. Drucker (1979), *Adventures of a Bystander*, Harper & Row. (風間禎三郎訳 (1979) 『傍観者の時代』ダイヤモンド社, 上田惇生訳 (2008) 『傍観者の時代』ダイヤモンド社)

Peter F. Drucker (1982), *The Last of All Possible World*, Harper & Row. (風間禎三郎訳 (1983) 『最後の四重奏』ダイヤモンド社)

Peter F. Drucker (1984), *The Temptation to Do Good*, Harper & Row. (小林薫訳 (1988) 『善への誘惑』ダイヤモンド社)

Peter F. Drucker (1995), *Managing in a Time of Great Change*, Truman Talley Books/Dutton. (上田惇生他訳 (1995) 『未来への決断』ダイヤモンド社。「社会転換の世紀」「知識労働と男女の役割分担」を収録)

ドラッカー (1997) 「ドリスと暮らして60年、『幸せな結婚の秘訣』とは——」(ドリス・ドラッカー (1997) に収録)

Peter F. Drucker (2005), *My Personal History*. (牧野洋訳・解説 (2005) 『ドラッカー 20世紀を生ききて 私の履歴書』日本経済新聞社)

Doris Drucker (1996), *Until I Met You*. (野中ともよ訳 (1997) 『あなたにめぐり逢うまで』清流出版)

Doris Drucker (2004), *Invent Radium or I'll Pull Your Hair*, University of Chicago Press.

Vivien Jones (2003), Appendix A Rank and Social Status, in Jane Austen, *Pride and Prejudice*, Oxford University Press.

William A. Cohen, *A Class with Drucker*, Amacom. (有賀裕子訳 (2008) 『ドラッカー先生の授業』ランダムハウス講談社)

ジェイン・オースティン, 中野好夫訳 (1963) 『自負と偏見』新潮文庫. あるいは中野康司訳 (2003) 『高慢と偏見』ちくま文庫. 原著 (1813)

新井潤美 (2001) 『階級にとりつかれた人びと』中公新書

新井潤美 (2008) 『自負と偏見のイギリス文化 J・オースティンの世界』岩波新書

大島一彦 (1997) 『ジェイン・オースティン 「世界一平凡な大作家」の肖像』中公新書

熊野純彦 (2007) 「解説1～4」(和辻哲郎『倫理学(一)～(四)』岩波文庫)

熊野純彦 (2009) 『和辻哲郎』岩波新書

夏目漱石 (1966) 『漱石全集第9巻文学論』岩波書店

三浦一郎 (2009) 「ドラッカーの周辺」(『ドラッカー学会年報3』)

和辻哲郎 (2007) 『倫理学(一)～(四)』岩波文庫. 原著 (1937, 1942, 1949)

【注】

- (1) 『最後の四重奏』の物語は20世紀初め第1次世界大戦がはじまる前のオーストリアとロンドンで展開される。『善への誘惑』の舞台は戦後のアメリカのキリスト教系の大学である。2作品の作風はかなり異なる。
- (2) ドラッカー (2008) 42頁。
- (3) 夏目漱石 (1966) 365頁。多少、仮名づかい等を変えた。
- (4) 夏目漱石 (1966) 370-71頁。
- (5) ジェイン・オースティン, 中野好夫訳『自負と偏見』6頁。
- (6) Vivien Jones (2003), pp.299-302.
- (7) ジェイン・オースティンの描く社会の特徴については、新井潤美 (2008) が参考になる。
- (8) ドリス・ドラッカー, 野中ともよ訳 (1997) 『あなたにめぐり逢うまで』清流出版。
- (9) ドラッカー, 野中ともよ訳 (1997) 「ドリスと暮らして60年、『幸せな結婚の秘訣』とは——」
- (10) ドラッカー, 上田惇生訳 (2008) 『傍観者の時代』ダイヤモンド社。なおコーン (2008) 38頁にはドラッカー一族の事業についての言及がある。
- (11) ドリス・ドラッカー (1997) 257-258頁。
- (12) ドリス・ドラッカー (1997) 165頁。
- (13) ドリス・ドラッカー (1997) 175-176頁。

- (14) ドラッカー(1997) 268-269頁.
 (15) ドラッカー(1997) 270-271頁.
 (16) Doris Drucker (2004), p.186.
 (17) ドラッカー(1997) 275頁.
 (18) ドラッカー(1997) 276-277頁.
 (19) Doris Drucker (2004), p.190.
 (20) ドラッカー(1995) 第21章.
 (21) ドラッカー(1995) 313 - 317頁.
 (22) ドラッカー(1995) 313頁.
 (23) 和辻哲郎『倫理学(二)』第3章第2節. 岩波文庫4冊の巻末に収録されている熊野純彦の詳細な解説は和辻の人と思想を知る上で参考になる.

【略歴】立命館大学経営学部教授. 京都大学大学院修了. 著書に『現代の流通メカニズムと消費者』『顧客の創造と流通』等.

イノベーションの7つの機会と用途開発

Seven Sources for Innovative Opportunity and New Use

岸本秀一
 Shuichi Kishimoto
 (金沢星稜大学)

Summary

In 1985, Peter Drucker published *Innovation and Entrepreneurship*, in which he suggested Seven Sources for Innovative Opportunities. The purpose of this paper is to investigate the reason why Seven Sources do not include finding New Use. Drucker often mentions New Use in his books, and it looks that he recommends New Use. However, New Use is not included Seven Sources as one source. On the other hand, Drucker mentions that the value to customer is not equally the value to the producer or the supplier. If we are able to recognize and utilize the incongruities with our strengths, it may achieve our New Use. There is possibility that New Use is related to incongruities and is incorporated at rather each source.

はじめに

ドラッカーは *Innovation and Entrepreneurship* において、ビジネスの成功のためのイノベーションの7つの機会 (Seven Sources) を以下のように提示してくれている。

- ① The Unexpected (予期せぬこと)
- ② Incongruities (不調和)
- ③ Process Needs (プロセスニーズ)
- ④ Industry and Market Structures (産業と市場の構造)
- ⑤ Demographics (人口動態, 人口統計学データ, デモグラフィック)
- ⑥ Changes in perception, meaning, and mood (認識や意味づけや雰囲気の変化)
- ⑦ New knowledge (新しい知識)⁽¹⁾